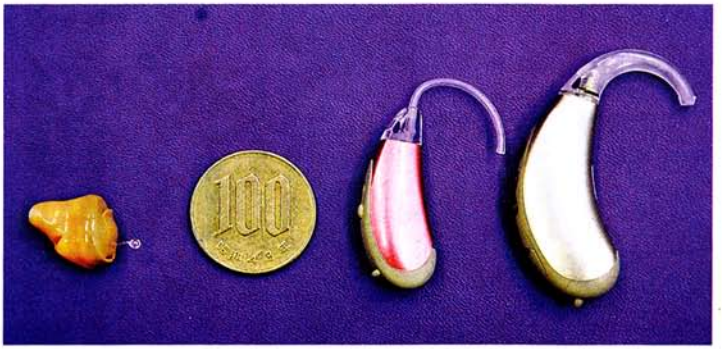
補聴器 生活に合わせ選択

3月3日は「耳の日」。軽度も含めると国内の難聴人口は2000万人とされ、補聴器の利用者も増えている。最近は小型化してデザイン性も向上した耳かけ型の人気が高まっているが、各タイプの特性を知って生活環境に合わせて選びたい。

（塚本博隆）



小型化してデザイン性も高まっている耳かけ型の補聴器（右側の２台）。左端は耳穴型補聴器

小型化した耳かけ型が人気

補聴器には、耳かけ型、耳穴に納める耳穴型、マイクが付いた本体からコードを伸ばしてイヤホンで聴くポケット型の3種類に大別される。日本補聴器工業会によると2012年の出荷台数は約52万台で耳かけ型が54%、耳穴型は39%、ポケット型は7%だった。08年までは耳穴型が最多だったが、09年に耳かけ型が逆転した。

岩崎電子補聴器センター札幌駅前店の福舛敏一店長は「最近の耳かけ型は小型化して髪に隠れるため、補聴器の装着を気付かれにくい」と説明する。かつては耳の後部全体を覆うほどの大きさがあったが、最近の機種は3センチほどだ。肌色が中心だった色もシルバーやメタリックピンクなどが登場、一見するとアクセサリーのようだ。

ただし故障の原因となる汗が他のタイプよりもかかりやすいのが短所だ。強い風が当たったり自転車に乗ると発生する風切り音も出やすい。耳にかかるため、眼鏡の装着者はやや邪魔になる。

耳穴型のメリットは耳の中に納まるため目立たなく、故障の原因となる汗がかかりにくいこと。ただしマイクとイヤホンが近接しているため、「ピー」と不快な音が聞こえるハウリングが発生しやすいため、音量が制限される短所もある。

ポケット型は本体が大きく長いコードが邪魔になるが、マイクとイヤホンが離れていてハウリングしにくい。耳穴型、耳かけ型より大きな電池を使用するため電池交換の頻度は少ない。音量変更などのスイッチも大きいため操作しやすく、高齢者に向いている。

デジタル化で雑音など抑制

補聴器の音声の処理方式にはデジタルとアナログがある。国内市場では02年にアナログが6割以上を占めていたが、12年はデジタルが91%を占めて圧倒している。

北大大学院医学研究科感覚器病学講座の武市紀人講師は「難聴といっても人によって聞こえ方は微妙に異なる。老人性難聴だと高音域の聞こえは悪くなるが低音域は悪くなってない人も多い」と説明する。デジタルの機種は「聞こえが悪くなった音域だけの聞こえ方を改善することが可能」とメリットを挙げる。ハウリング、雑音、衝撃音の抑制もデジタル化によって容易になった。

最近は補聴器に似た「集音器」「助聴器」などの機器が通信販売などで入手できる。補聴器は薬事法で認定した管理医療機器だが、「集音器」「助聴器」は医療機器ではない。武市講師は「集音器は音を単純に上げる機能はあるが、微調整してその人にあった聞こえ方に改善はできない。例えば家族でテレビを見ていて自分だけが『音が小さい』と感じた時などの使用にとどめてほしい」と話す。

購入前に耳鼻科受診を

また難聴の原因が耳ではなく脳に潜んでいる可能性もある。そのため補聴器は耳鼻科で受診してから購入したい。補聴器は一般の電器店でも販売しているが「家にいることが多い人と外に出ることが多い人でも微妙に調整が異なる。購入してから再調整することも多い」（福舛店長）という。

個々の生活環境に合わせた補聴器の調整には一定の経験が必要だ。補聴器についての知識と5年以上の実務経験を持つ「認定補聴器技能者」（財団法人テクノエイド協会が認定）のいる「認定補聴器専門店」が店舗選びの目安となる。道内では岩崎電子など27店が該当している。